

平成 20 年度海外研修報告

島根大学医学部附属病院 山本 泰司

【参加した目的とその成果】

最先端の研究がどのような背景で生まれ、放射線技師がどのように関わっているのかを研修での広義な目的とした。研究では、Statistical Parametric Mapping(SPM)が SPECT, PET, MRI でどう利用されているか、更には Molecular imaging(MI)の現状を身近に感じるというものであった。

背景は、「医療関係の企業に留まらず、政府や多方面から膨大な資金が流入し、その恵まれた環境から、優秀な研究者が世界中から集まる」という図式であった。これらは、スタンフォード大学の長年の実績とブランド性の高さから投資するメリットが大きいからであろう。この壮大なスケールは日本の地方大学と比較はできないものの、限られた環境でも新しい研究成果を生み出す日本の地方大学も素晴らしい、とも感じた。研究に対する技師の関わりについては後ほど述べる。

目的の一つであった SPM の話題は、Functional MRI で若干触れる程度であり、新情報は無かった。しかし、MI 特に Bioluminescence(BL)に関しては最先端の話題が提供され、満足のいくものであった。中でも、動物実験室の見学において、その設備の充実度（動物用 SPECT/CT, PET/CT, BL Detector 等々）、各研究分野のスタッフが自由に利用出来る環境には感心し、これら研究現場を惜しげもなく公開できるのは、更にハイレベルな研究が他の施設で行われているからと推測すると、正直、驚異さえ感じた。以上、目的に対する成果は十分であった。

【米国と日本の放射線技師制度の違いをどのように感じたか】

参加した目的の一つであった放射線技師の研究に対する関わりについて述べる。研究分野と臨床分野の技師は分かれ、研究分野の技師もリーダーの指示に従って作業を行い、技師独自の判断で研究を行う環境は整っていないようであった。また、臨床現場の技師も決められた時間内での業務のみで、それ以外の時間を費やし研究は行わない（個人の時間をとても大切にしているとのこと）。技師制度に関して、テクノロジスト認定組織（モダリティー別に専門資格が必要）が存在し、各種資格を認定、維持させるために活動している。具体的には、各地区（大規模施設）に定期講習会を開催し受講すれば維持できる。「米国のような大きな国では一か所に集まり講習会を開くのは費用、時間の面から困難である」との話だった。つまり、他の地域の技師との交流も少なく、研究活動が行われない一因かも知れない。以上のことから、いつも最先端の技術を貪欲に収集し、自分のスキルアップを目指し研究、学会発表している日本の放射線技師は素晴らしいと感じた。

【今回の研修で得たことを今後どのように生かしたいか】

スタンフォード大学での研修を修了したという実績は、研究活動を行う上で大きな自信に繋がる。更に、日本の技師のあるべき姿を再認識し、その恵まれた環境に感謝しながら今後の活動に励みたい。総じて、日本での放射線技師のレベル向上のためにも重要な研修であり、「研修で得たことを今後に生かす」項目は無限大である。

最後に、日本放射線技術学会を始め、お世話いただいた関係者の皆様に感謝して報告を終わる。



写真:Clark Center 前にて(撮影:内田幸司)